

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

言語・地理情報データベース構築の未来図

著者	渡辺 満久
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	38
ページ	173-176
発行年	2003
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011348/

言語・地理情報のデータベース構築の未来図

WATANABE Mitsuhisa

東洋大学社会学部教授 渡 辺 満 久

一九五六年生まれ

東京大学大学院理学系研究科地理学専門課程博士課程修了。理学博士。

専門は地形学（自然地理学）。

『日本第四紀地図』（東京大学出版会）、『新編日本の活断層』（東京大学出版会）、『九州の活構造』（東京大学出版会）、『都市圏活断層図（神戸、東京周辺など）』（国土地理院）、『活断層地形判読』（古今書院）、『逆断層アトラス』（東京大学出版会）、『デジタル詳細活断層マップ』（東京大学出版会）などを共同執筆。

岩手県・宮城県・福島県・新潟県・神奈川県・小倉市地域活断層調査委員。

国外では、中国西部・サハリン・韓国・台湾において各国の研究者と共同研究を実施。

一 はじめに

アジアの地名や関連情報にアクセス可能なANSWERには、地域の理解や文化の歴史的展開の解明など、さまざまな分野への貢献が可能であると考えている。また、「双方向性」を謳っていることから、最新かつ正確な情報が掲載されるサイトとなることが期待できる。

現段階においては、対象地域が非常に限られており、若干の不満も感じる。しかし、対象地域に関しては、今後の拡大は可能であろう。これとは別に、一ユーザーとして、二つの要望をしたいと思います。一つは、情報検索方法（使い勝手）への注文である。もう一つは、掲載される内容への希望である。

二 情報検索方法への期待

現在のANSWERにおいては、特定の項目（キーワード）を入力するという方式が採用されている。調べたい地域が特定されている場合や、必要とする情報（地名・文献・画像・音声など）に当てがある場合は、これでよいのであろう。また、この方式そのものには問題があるというわけでもない。

しかし、情報探索においては、地

図を眺めながら「ここは、どんな所だろうか？」という探し方もある。地図を見ながらある場所をクリックし、その地名や文献などを知るという手法（図I）をとることはできないであろうか。このような検索方法は特別なものではない。筆者の専門である活断層研究の分野では、まず全体をながめて、活断層があるかどうかを確認し、関心を持った部分を拡大表示していくと、断層名や変位量などの詳細データが得られるような出版物を作成している。

この方法では、基図となる地図をどのように選定するかが最も大きな問題となる。全域において同程度の精度で地図が入手できるのであれば、検討に値すると思っている。地名とのリンクも仕事量は膨大ではあるが、地名に関してはすでに蓄積がある（入力済み）のであるから、まったく不可能なことではないであろう。地図の整備ができるのであれば、是非検討をお願いしたい。

三 コンテンツへの期待―基礎単語の収録

自然地理学の分野では、過去から現在への環境変化と、歴史や文化の変遷を問題にすることがある。もし、自然災害に関わる記録があれば、そこから人間への影響を直接的に考察することができるであろう。ただし、自然災害に関わる記録を収集することは、現実的にはほとんど不可能であり、それをANSWERに期待するつもりはない。しかし、それに代わるものとして、ある種の言葉を収録することは可能ではないかと考えている。

大きな環境変化があれば、それは人間の移動を促すであろう。人間の移動の軌跡は、言葉の分布に表れるのではないだろうか。すなわち、言葉の



渡 辺 満 久 氏

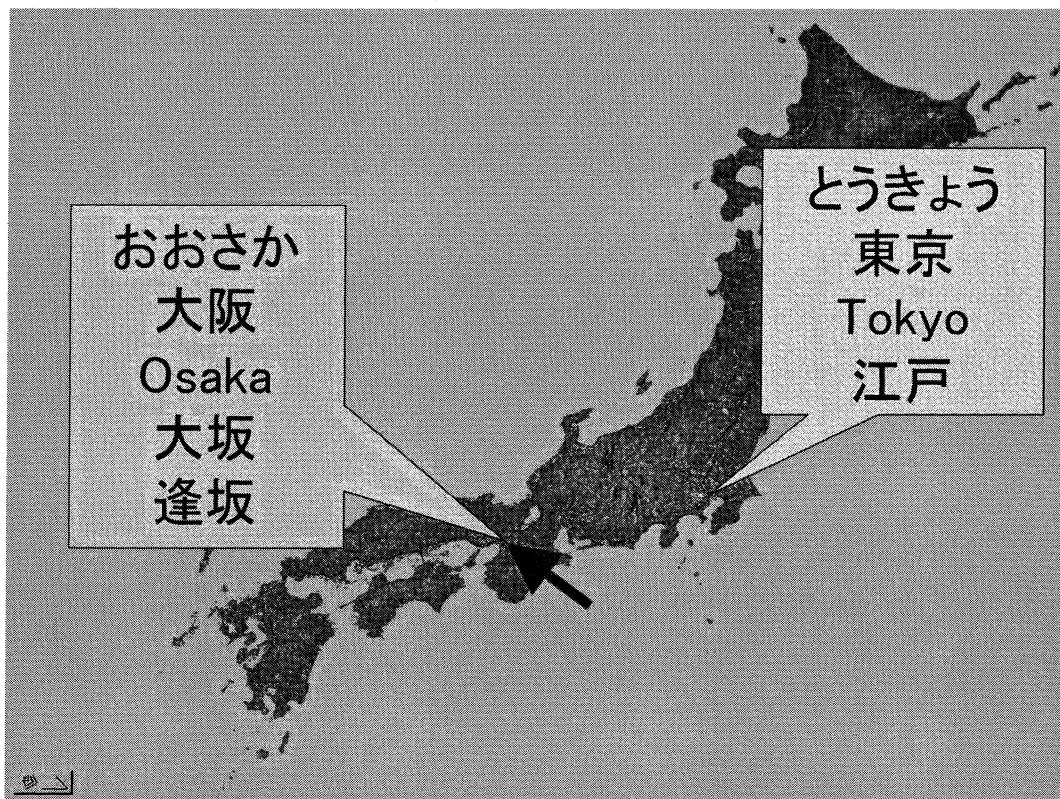


図 I

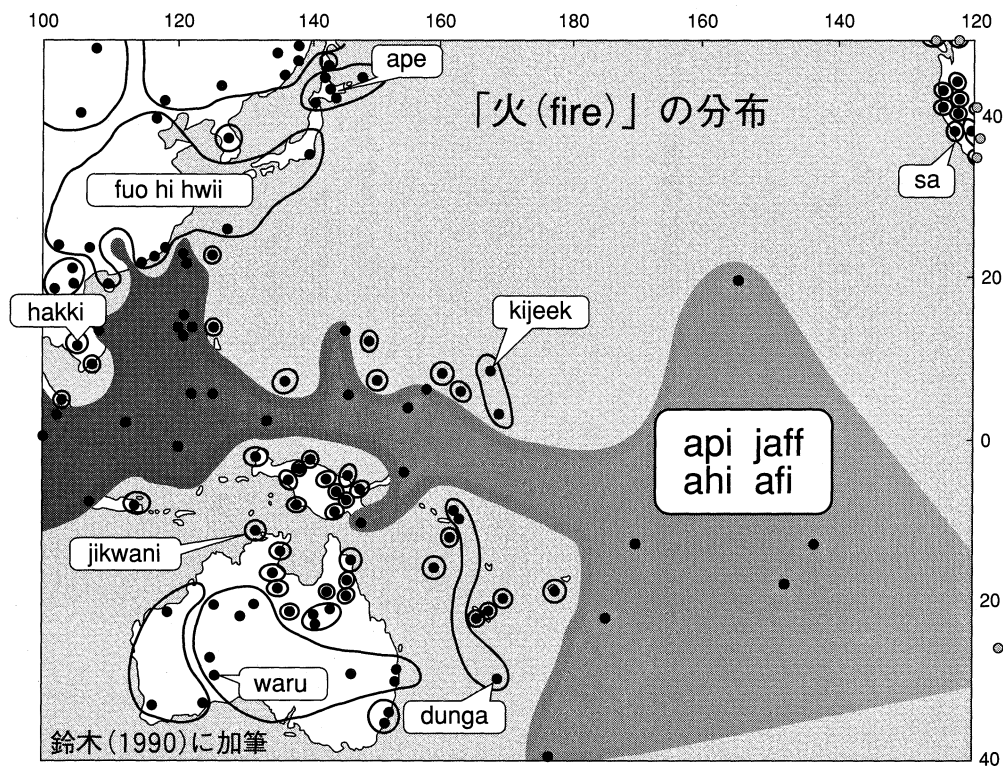


図 II

分布から人間の移動を復元し、環境変化との関係を考察できると考えている。ただし、高度な概念を含むような言葉は時代とともに変化しやすいと思われる。ここで想定している言葉とは、「齒」・「目」・「火」といった、非常に基礎的な単語である。

図Ⅱは、アジア周辺において、「火」をどのような発音で表しているかを示しており、ほとんど同じ発音が見られる地域を括弧している。これは、鈴木（一九九〇）をもとに、筆者が加筆したものである。これを見ると、ニューギニア付近では、場所が少し違くと全く異なる発音で「火」を表現している。ところが、南太平洋一帯の広範囲においては、「api, ai, ahi, hi」といったような、ほとんど同じ発音が見られている。このような現象は、ニューギニア周辺の動かない人たちの横を、大集団が移動していったことを表しているように思われる。

上の推定が正しいとすれば、限られた地域のことではなく、かなりグローバルな環境変化があったことを示すのではないだろうか。古環境研究の分野では、約三五〇〇年前に、地球全体に約二度の気温低下があったとされている。日本の東北地方において、現在の気候環境のもとでは、壊滅的な冷害が発生するのは一〇〇年に三回程度のことである。ところが、平均気温が二度低下すると、収穫量半減という大冷害が発生する確率は四〇％となる。すなわち、二度という寒冷化は、中緯度における農業生産性に大打撃を与える。それは、中緯度から低緯度へ、大規模な人間の移動を促すには十分な気温低下量である。図Ⅱの「火」の分布は、この時期の環境変化に対応している可能性がある。

このように、基礎的な単語の分布を示すことによって、過去の環境変化

とそれにとりまう人間の移動も検討できるようになると思われる。アジアの文化の歴史的展開を考察する上でも、基礎単語の収録は重要な意味をもつと考える。

四 おわりに

以上、一ユーザーとしての勝手なお願いを述べてみた。しかし、現実離れた夢のような提案であるとは思っていない。質や量には限りがあるとしても、是非ご検討いただきたいと願っている。今後の、ANSWERの発展を陰ながら見守らせていただきたい。

文献

鈴木秀夫（一九九〇）「気候の変化が言葉をかえた」NHK BOOKS。